

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 5 月 21 日現在

機関番号：64401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2023

課題番号：16K02028

研究課題名(和文) カザフスタンにおける伝統医療とイスラームの人類学的研究

研究課題名(英文) Cultural Anthropological Study on Traditional Healing and Islam in Kazakhstan

研究代表者

藤本 透子 (Fujimoto, Toko)

国立民族学博物館・人類文明誌研究部・准教授

研究者番号：10582653

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：カザフスタンを中心に伝統医療の展開を分析し、社会と宗教及び身体の関係について考察することを目的として文化人類学的調査を行った。その結果、牧畜生産物や薬草の利用、治療者への相談、聖地への参詣等が、病院での治療と併存していることがわかった。特にある種の心身の不調は治療者になる徴とみなされ、他者を癒すことのみ統御できるとされる。また、聖者廟のみならず洞窟や泉への参詣をとおして病気快癒が祈願されている。これらの観念と実践は、病気や不調を抱えつつ生きる方策を示すものとして社会的に機能するが、近代医学をふまえた批判とイスラームの教義に反するという批判があり、議論が続いている構図が明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中央アジア地域に対する理解を深める一環として、イスラーム実践としては問題視されることの多い治療者の活動や、病気快癒祈願のための参詣に着目して文化人類学的調査を行うことで、現代におけるシャマニズム的伝統とイスラームの関係の一端を明らかにした。また、近代医学に基づく治療と伝統医療が併存する状況のもとで地域社会の人々のあいだで行われている議論は、身体観と世界観に深く関わっていることが調査から示された。この研究はムスリムが多い地域の多角的理解につながると同時に、人が心身の不調や病気の経験を受け止め意味づけていく社会文化的過程の解明へ向けて意義をもつ。

研究成果の概要(英文)： This study analyzes Kazakh healing practices, which constitute a crossing of shamanistic tradition, Islam, and modern medicine, based on fieldwork in north-eastern Kazakhstan. The findings reveal that villagers practice pluralistic healing: using pastoral products and herbs, consulting with emshi (healer), visiting sacred places to pray, and going to hospitals. It is believed that some kinds of illness are the sign of healers' talent, and that healers can control their own ailments only by healing the others' illnesses. Both healers and ordinary people visit sacred places such as caves, springs and saint mausoleums, to pray for healing based on their worldviews. Their beliefs and practices are sometimes criticized as they are against Islamic dogma but socially function as ways to live with illness. The ongoing debate on healing indicates the sociocultural process which gives meaning to the experience of illness in Kazakhstan.

研究分野：文化人類学、中央アジア地域研究

キーワード：伝統医療 イスラーム シャマニズム 世界観 身体観 文化人類学 カザフスタン 中央アジア

## 1. 研究開始当初の背景

中央アジアでは、1990年代の体制移行に伴う社会変容と伝統文化への関心の高まりのなかで、カザフ語でエムシと呼ばれる治療者の活動がさかんになった。治療者の活動は、現代におけるイスラーム実践の一部として研究される一方（引用文献①②③④）、シャマニズムの観点からも研究が行われてきた（引用文献⑤⑥⑦⑧）。この治療者の活動を含めて、地域社会においてカザフの伝統を受け継ぐとみなされている治療を、本研究では伝統医療と呼び分析対象としている。伝統医療はソ連時代には後進的であるとして批判され、反宗教政策と近代医学の普及により消滅したかに見えたが、現代においてどのように行われているのか、治療者の活動が顕著なカザフスタンを中心に文化人類学的調査を行うこととした。

## 2. 研究の目的

カザフスタンにおける伝統医療とイスラームの展開を文化人類学的調査に基づいて分析し、社会と宗教及び身体の関係について考察することを目的として調査研究を行った。開始当初は1990～2000年代における伝統医療の再活性化に焦点をあてていたが、調査を進めるなかで、再活性化の時期を過ぎた後に、議論の争点となりながら伝統医療が存続している構図を明らかにすることが重要と気づいた。このため、まず地域社会におけるイスラーム実践の動態を概観し、次にシャマニズム的伝統とイスラームの交錯点にある伝統医療の位相を近代医学との関係をふまえて明らかにした上で、2010年代における治療者の活動と参詣地での病氣快癒祈願の具体例を分析することとした。

## 3. 研究の方法

### (1) 現地調査

カザフスタンを中心として、2016、2017、2019年に現地調査を実施した。主にカザフスタン北東部のパヴロダル州バヤナウル地区の村落、モスク、参詣地で、参与観察とカザフ語及びロシア語での聞き取りを行った。また、カザフスタン最大の都市アルマトゥで、診療所や民間治療者協会から聞き取りをした。調査時点の状況だけでなく、ソ連成立以前にさかのぼる伝承や、ソ連時代の事例も聞き取ることで歴史的経緯も含めて検討した。

### (2) 文献調査

現地及び日本で文献を収集して調査した。特に19世紀から20世紀初頭のカザフ社会に関するロシア語文献、1990年代以降のロシア語文献と英語文献におけるシャマニズムとイスラーム及び伝統医療に関する記述を整理した。ソ連時代に関する文献は乏しいが、地域史を詳述したカザフ語文献を参照して検討した。

### (3) インターネット上の情報収集

当初の予定にはなかったが、コロナ禍の影響や健康上の理由で渡航できない期間があったことから、インターネット上に公開されているカザフ語およびロシア語の記事を閲覧して情報収集し、現地調査データおよび文献と照らし合わせて検討した。

## 4. 研究成果

### (1) 社会再編のなかのイスラーム

研究開始当初は、ソ連解体後の地域社会の再編過程におけるイスラーム実践の一部として、治療者の活動を分析した（引用文献⑨）。中央アジアの地域社会に広く目を向けると、イスラーム実践を多様な立場から主導する人々がいる。知識人としては、ある程度のイスラーム知識を持つムッラーが村落部で活動してきたが、イスラーム教育機関で学び礼拝の指導者としてモスクに勤務するイマームが次第に影響力を増している。また、血筋に着目すると、預言者の子孫サイイドや布教者の子孫であるコジャとして、系譜を重んじる活動をするようになった人々もいる。このような状況のなかで、イスラームとシャマニズムの要素を含む治療者の活動も活発化した。

地域社会の生活において、イスラームの五柱のうち1日5回の礼拝を行う人々は多くないが、断食月に断食する人々は増加傾向にあり、断食月を中心に喜捨も行われている。また、人生儀礼のなかで、命名儀礼や割礼、婚姻契約、葬送礼拝、そして死後40日、1年などに行われる死者のためのクルアーン朗唱が、イスラーム実践として重視されている。特にカザフ人のあいだでは、父系の祖先を中心とする死者の霊魂に敬意を表してクルアーンを朗唱することが重んじられており、これを死者崇敬と呼ぶことができる。聖者崇敬は、この死者崇敬の延長上にある。治療者の活動においても、祖先や聖者がしばしば重要な役割を果たしている。

イスラーム実践は、社会主義体制から移行後に地域社会が再編される過程で、人々のあいだに重層的なつながりを生み出してきた。聖者の子孫のつながりが再構築されたり、スピリチュアルな浄化を目指す宗教運動が生じたりする一方で、イスラーム教育機関などで学んだ人々は別のネットワークを形成し、イスラームに基づく共同性を求めて連携している。このように新たなつ

ながりが生じる反面、しばしば見解の相違による亀裂も地域社会に生まれている。

イスラームが社会的に重要性を増すにつれて、社会主義に基づく世俗化を経験した地域における信仰の在り方が模索され、民族的伝統とイスラームとの緊張をはらんだ関係が意識されるようになったのが2000～2010年代の特徴であった。イスラームの在り方をめぐる議論は、初期イスラームへの回帰を目指すサラフィー主義と、地域の伝統を重んじる伝統主義の二項対立として現地で語られることが多いが、実際には明確に二分できるものではない。イスラームと伝統の関係に関して多様な意見が交わされるなかで、死者崇敬、聖者崇敬、そして伝統医療に関わる治療者の活動が特に争点となっている。

## (2) 伝統医療の位相

治療をカザフ語で「エム」という。カザフ語の「ハルック・エム」は、直訳すれば「民衆の治療」で民間医療をさす。民間医療は、広義ではロシアから伝わった薬草利用、中国に由来する鍼灸なども含み、狭義では伝統(カザフ語で「ダストゥル」)を受け継ぐ治療(伝統医療)を指す。調査開始当初は、伝統医療を主に宗教的側面のみから捉えていたが、調査を進めるにしたがって非宗教的側面も重要なことが判明した。また、より幅広く近代医学との関係をふまえて伝統医療を捉える必要のあることがわかった。

このため、近代医学の受容過程についてカザフスタン北東部の事例を検討した。西欧に始まった近代医学は、19世紀にロシアを介してカザフ社会に伝えられた。当時のカザフ社会は、遊牧民としての生活と文化を保持しながら、ロシア帝国による支配が拡大していく過程にあった。調査を行ったカザフスタン北東部では、1826年にバヤナウルにコサック要塞が建設され、1833年に病院も開設された。1918年には、この病院にカザフ人医師が勤務し始めた。ソ連時代、カザフ遊牧民の強制的な定住化が進められた後、1934年にバヤナウル地区病院が開設されたが、地区内の複数の定住村落に病院が開設されたのは1970年代になってからであった(引用文献⑩)。1990年代にはソ連解体にともなう混乱の影響により、病院が十分に機能しない状態に陥った。2000年代以降に状況は改善されたが、医師がおらず看護師が常在する診療所だけの村落も多い。

2010年代におけるカザフスタン村落部での調査からは、上述の状況のもとで、村人たちが牧畜生産物(乳製品や油脂)、薬草、市販薬を利用し、治療者に相談し、地区中心地や州都の病院で診察と治療を受けるなど、多角的な医療を組み合わせて活用していることが明らかとなった(引用文献⑪)。例えば、カザフ語で「寒さが触れる」と表現される風邪の際には、次のような治療法がとられていた。第1に、村落部では多くの世帯で家畜を飼っており、ヒツジの脂肪尾を加熱して抽出した油脂を胸部に塗り、温かい牛乳にバターを溶かして飲み体を温める。第2に、薬局で購入したカミツレを煎じてうがいしノイバラの実を煎じて飲むなど、ロシアの影響を受けた薬草による治療も行われる。第3に、市販の解熱剤などが利用される。こうして家庭内で治療を試みても症状が改善されない場合に、病院で診察と治療を受ける。近代医学に基づく診察や治療と世帯内で行われる民間医療は併用され、さらに民間医療としてもロシアの影響を受けた治療法とカザフの伝統を受け継ぐ治療法が併用されている。

また、カザフの伝統医療のうち、特定の治療のみが近代医学の裏付けのもとで積極的に推進されたことがわかった。例えば中央ユーラシアの牧畜民が伝統的に飲用していた馬乳酒は、ロシア帝国期にロシア人研究者により注目され、ソ連時代には馬乳酒を利用した療養がサナトリウムで行われた。カザフスタン独立後には、伝統的な健康飲料として馬乳酒が再評価されている(引用文献⑫)。これに対し、カザフの伝統医療のなかでソ連時代に否定的に捉えられカザフスタン独立後にも議論が続くという異なる展開を示したのが、宗教的側面を含む治療者の活動である。

## (3) エムシと呼ばれる治療者とその活動

カザフスタンでは、近代医学に基づく診察と治療を行う病院勤務の医師は、カザフ語で「ダリゲル」と呼ばれる。これはロシア語のドクトル(英語のドクターに相当)に由来する用語である。これに対して、カザフの伝統医療を行う人々が「治療者」を意味する「エムシ」という用語で呼ばれる。治療者のカテゴリーとしては、「スヌクシ」と呼ばれる骨接ぎ、イスラームに基づく治療を行うと主張する「タウィップ」、シャマンを意味する「バクス」などがある。

このうちバクスについては、19世紀における記述がある。当時のカザフ社会では、イスラームの要素を取り込みながらバクスが活動していた。カザフ人として初めてシャマニズムを研究したショカン・ワリハノフ(1835-65)は、天空の神テングリや火への信仰などを含む世界観がイスラームの影響を受けつつも存続していることを示した上で、バクスが病気を神や精霊に関連付けトランスを伴う治療儀礼を行っていることを指摘した(引用文献⑬)。カザフスタン北東部での調査からは、反宗教政策がとられていたソ連時代にも、村落部で治療儀礼が行われていたことがわかった。ただし、聞き取りした事例はトランスを伴わず、バクスという名称も用いられていなかった。地域によっても差があるが、ソ連時代の1940年代にイスラームが公式に認められたのに対し、シャマニズムは認められなかったことが、バクスの名称や活動に影響したと考えられる。現在では、治療者の総称である「エムシ」が最も広く用いられている。

治療者になる過程を検討すると、治療を行う素質は子孫のひとりに宿するという観念があり、心身の不調や災厄などが治療者になる兆しとみなされていた。また、治療者の素質を受け継いだ人々は、他者を治療することでのみ自分の病いを統御できるという観念がある。治療者となる過程に関わるこうした観念は、シャマニズムの伝統を受け継いでいる。その一方で、19世紀のシ

ヤマンに見られた師弟関係や修行は現在では明確でないなど変化が生じていることがわかった。

女性の治療者が比較的多いが、モスクに通いイスラームの教義に厳格に従おうとする女性も現れていることを考え合わせると、男性が正統なイスラーム実践を担い女性が民衆イスラームを担うという構図では説明できない。聞き取りした事例では、ソ連解体とカザフスタン独立にともなう混乱のなかで、男性の失業により女性が一家の担い手となるなど、女性に負担がかかる場合があったことが体調不良に影響した可能性がある。さらに、社会変容のなかで女性が活動の領域を広げていく過程で、治療者としての活動も表立って行われるようになったと考えられる。

ソ連解体とカザフスタン独立を経て伝統医療への関心が高まった1990年代には、民間医療センターと民間治療者協会がアルマトゥ市に開設された。こうした伝統医療の再活性化は、カザフの伝統への関心の高まりの一部分であったといえる。しかし、民間医療センターは2008年に閉鎖され、2010年代には民間治療者協会の活動も限定的となった。その背景には、ビジネスとして民間医療を行う人々が増加し問題が生じるなかで、カザフの伝統を受け継ぐと主張するエムシの行為も金銭目的であるという批判が高まったことがある。聞き取りから、真のエムシは自ら宣伝せず患者から渡された少額の金銭や物品のみ受け取るという観念があることがわかった。

エムシと呼ばれる治療者の活動は、次のような身体観と関わっている。エムシはさまざまな不調をかかえて訪問する人々に対応するが、特定の病いや邪視はエムシでなければ癒せないとみされている。悪霊によって乳幼児がかかる病いがあるとされるほか、他者の羨みの視線（邪視）や、羨みを伴う褒め言葉によって体調不良が引き起こされるという観念がある。このような身体観に基づき、しばしば病院などでの治療と並行してエムシによる儀礼も行われる。鞭を用いた悪霊払いなどのシャマニズム的伝統と、クルアーンの章節を唱えるなどのイスラームの影響が儀礼には見られる。また、ソ連時代末にロシアで広がった生体エネルギーの観念がカザフ人のエムシの語りに取り入れられるなど、伝統的な身体観の再解釈も生じている。

一方では近代医学の観点から、他方ではイスラームに基づく観点から批判されながらも儀礼が行われる要因として、治療者の素質を継承する者は他者を癒さなければ病み続けるという観念と、特定の病いは超自然的存在や他者からの羨みの影響で生じるという観念が、ある程度まで共有されていることが挙げられる。伝統医療を実践する人たちにとって、こうした観念は近代医学と対立するのではなく併存するものとして捉えられている。儀礼が病院での治療と並行して試みられることも多く、しばしばエムシ自身も患者として病院を利用する。また、モスクのイマームは、エムシの活動はイスラームの教義に反すると批判するが、エムシ自身はムスリムとしての信仰を重んじている場合が多い。心身の不調や病気の経験を受け止め意味づけていく社会文化的過程として、伝統医療をめぐる議論が行われている構図が、調査から明らかになった（引用文献⑩）。

#### （4）参詣地と病気快癒祈願の諸相

中央アジアでは病気快癒や子授け、また開運などを願って、しばしば聖者廟などへの参詣が行われている。カザフスタン南部のトルキスタン市にあるヤサヴィー廟は参詣地としてよく知られているが、それ以外にも20世紀以降に新たに成立した墓廟が参詣地となっている。その一例として、カザフスタン北東部のパヴロダル州バヤナウル地区では、イスラームに造詣の深い知識人であったマシュフル・ジュシブ・コピエフ（1858 - 1931）の墓廟を挙げるができる。

この墓廟成立の経緯と参詣形態について検討した結果、次のことが示された。マシュフル・ジュシブは、生前から子授けや病気快癒の力があつたと地域住民の間で信じられていたが、ソ連時代に宗教者および民族主義者として批判され、1952年にその墓廟は破壊された。翌年に子孫により墓廟が再建され、カザフスタン独立後を経て2006年に改増築されて、地元の人々以外にも知られるようになった。2017年の調査時には旧首都アルマトゥ、首都ヌルスルタン（現アスタナ）、国境を接するロシア連邦ノヴォシビルスク州などからも参詣に訪れた人々がいた。ほとんどは家族や友人と連れ立って参詣していたが、リーダーに率いられて参詣するグループもあった。このようなグループは1990年代以降の宗教への関心の高まりのなかで形成され、モスクのイマームらからはイスラームの教義に基づいていないという批判をしばしば受けている。また、墓廟近くの泉や樹木が信仰の拠り所となっていること等についても、参詣者のあいだで議論が生じている。参詣の目的や形態が議論されるなかで、墓廟の管理者を務める子孫や地元出身者は、参詣を肯定しつつも過度な崇敬を抑制するという難しいバランスをとっている（引用文献⑬）。

このような墓廟をめぐる動きと並行して、古くから信仰の対象であった洞窟も参詣地及び観光地として改めて注目を集めるようになった。東カザフスタン州とパヴロダル州には、コヌル・アウリエという名前を冠された洞窟がある。このうちパヴロダル州バヤナウル地区の洞窟は、天空の神であるテングリへの信仰に関連するとされ（引用文献⑩）、19世紀末から20世紀初頭にはろうそくの火や洞窟内の水を用いた治療儀礼が行われていた（引用文献⑭）。現地調査から、現在ではこうした治療儀礼は行われていないものの、洞窟内の水に薬効があるという信仰は受け継がれていることがわかった。また、この洞窟に関する口頭伝承を検討すると、豊穡の女神であるウマイにまつわる伝承、テュルクのカガンに関する伝承、そしてイスラームの聖者とされるコヌル・アウリエにまつわる伝承が併存していた。病気快癒や子授け祈願のための参詣はイスラーム実践の一環であると同時に、洞窟や泉などに聖性をみとめるテュルクの信仰の現代的な展開としても位置付けられる。伝統医療に関わる身体観は世界観とも連動していることが、これらの参詣地における病気快癒祈願の事例をとおして明らかとなった。

以上のように、本研究ではカザフスタンの事例から、伝統医療の位相を歴史的経緯をふまえて検討した。特にイスラーム実践としては問題視されることの多い治療者の活動や、病気快癒祈願のための参詣に着目して文化人類学調査を行うことで、現代のカザフスタンにおけるシャマニズムの伝統とイスラームの関係の一端が明らかになった。また、近代医学に基づく治療と伝統医療が併存する状況下で地域社会の人々の間で行われている議論は、身体観と世界観に深く関わっていることが調査から示された。この研究はムスリムが多い地域の多角的理解につながるとともに、人が心身の不調や病気の経験を受け止め意味づけていく社会文化的過程を解明していく上で意義をもつ。未発表の成果を公開し、中央アジア及び他地域との比較、文化人類学と歴史学と口頭伝承研究の領域を超えた連携など、本研究を行うなかで見えた課題に今後は取り組んでいきたい。

<引用文献>

- ① Privratsky, B. G. 2001 *Muslim Turkistan: Kazakh Religion and Collective Memory*. Richmond: Curzon.
- ② Jessa, P. 2006 Aq Jol Soul Healers: Religious Pluralism and a Contemporary Muslim Movement in Kazakhstan. *Central Asian Survey* 25(3): 359-371.
- ③ Kehl-Bodrogi, K. 2008 “*Religion is not so Strong Here*”: *Muslim Religious Life in Khorezm after Socialism*. Berlin: LIT.
- ④ Rasanayagam, J. 2011 *Islam in Post-Soviet Uzbekistan: The Morality of Experience*. Cambridge: Cambridge University Press.
- ⑤ Valikhanov, Ch.Ch. 2012[1904] Sledy shamanstva u kirgizov. In Valikhanov, Ch.Ch. *Sobranie sochinenii v vos'mi tomakh*. Pervyi tom, pp.425-447. Almaty: Dayk-Press.
- ⑥ Basilov, V. N. 1992 *Shamanstvo u narodov Srednei Azii i Kazakhstana*. Moskva: Nauka.
- ⑦ Penkala-Gwęcka, D. 2013 Mentally Ill or Chosen by Spirits?: ‘Shamanic Illness’ and the Revival of Kazakh Traditional Medicine in Post-Soviet Kazakhstan. *Central Asian Survey* 32(1): 37-51.
- ⑧ Somfai Kara, D. 2017 The Swan Dance: A Kazakh Healing Ritual from Syr-Darya Region. *Shaman* 25(1-2):197-206.
- ⑨ 藤本透子 2018「社会再編のなかのイスラーム——地域における生き方の模索」宇山智彦・樋雅人編『現代中央アジア——政治・経済・社会』pp. 209-230, 東京：日本評論社。
- ⑩ Aqibaev, R. M. et al. 2001 *Bayanaula*. Astana: Foliant.
- ⑪ 藤本透子 2020「カザフスタンにおける伝統医療とエムシ（治療者）の活動」川田牧人・白川千尋・飯田卓編『現代世界の呪術——文化人類学的探究』pp. 135-163, 横浜：春風社。
- ⑫ 藤本透子 2023「馬乳酒で体を癒す」『月刊みんぱく』47（4）：7.
- ⑬ 藤本透子 2021「聖者になる過程——カザフスタンにおける近代化の経験とイスラーム」長谷千代子・別所裕介・川口幸大・藤本透子編『宗教性的人类学——近代の果てに、人はなにを願うのか』pp. 174-202, 京都：法蔵館。
- ⑭ Konshin, N. Ya. 2005[1901] *Trudy po kazakhskoi etnografii*. Pavlodar: 《EKO》 GhÖF.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計17件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 藤本透子	4. 巻 -
2. 論文標題 イスラームの今	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 小松久男・梅村坦・坂井弘紀・林俊雄・前田弘毅・松田孝一編『中央ユーラシア文化事典』丸善出版	6. 最初と最後の頁 522-523
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤本透子	4. 巻 -
2. 論文標題 食の習わし	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 小松久男・梅村坦・坂井弘紀・林俊雄・前田弘毅・松田孝一編『中央ユーラシア文化事典』丸善出版	6. 最初と最後の頁 312-313
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤本透子	4. 巻 -
2. 論文標題 結婚をめぐる交渉 中央ユーラシア草原地帯におけるカザフ社会の変容	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 磯貝真澄・帯谷知可編『中央ユーラシアの女性・結婚・家庭 歴史から現在をみる』国際書院	6. 最初と最後の頁 169-202
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤本透子	4. 巻 -
2. 論文標題 人生儀礼（カザフスタン）	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 イスラーム文化事典編集委員会編『イスラーム文化事典』丸善出版	6. 最初と最後の頁 66-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Toko Fujimoto	4. 巻 -
2. 論文標題 The Transformation of Saint Veneration: A Cultural Anthropological Study of Mashhur Jusip 's Grave in Northeastern Kazakhstan	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Istoriya i kul ' tura velikoi stepi (Materialy mezhdunarodnoi nauchno-prakticheskoi konferentsii), M.Kh.Abusseitova (ed.), Almaty: Shygys pen Batys.	6. 最初と最後の頁 456-466
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤本透子	4. 巻 -
2. 論文標題 聖者になる過程 カザフスタンにおける近代化の経験とイスラーム	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 長谷千代子・別所裕介・川口幸大・藤本透子編『宗教性的人类学 近代の果てに、人はなにを願うのか』京都：法蔵館	6. 最初と最後の頁 174-202
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤本透子	4. 巻 -
2. 論文標題 移動する人々のつながり カザフ草原に生きる家族の事例から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 山田孝子編『人のつながりと世界の行方』京都：英明企画編集	6. 最初と最後の頁 65-80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤本透子	4. 巻 -
2. 論文標題 カザフスタンの儀礼と食	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 野林厚志他編『世界の食文化百科事典』丸善出版	6. 最初と最後の頁 618-619
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤本透子	4. 巻 -
2. 論文標題 カザフスタンにおける伝統医療とエムシ（治療者）の活動	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 川田牧人・白川千尋・飯田卓編『現代世界の呪術 文化人類学的探究』春風社	6. 最初と最後の頁 135-163
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤本透子	4. 巻 -
2. 論文標題 中央アジア草原地帯におけるコミュニティの再編と維持 カザフのアウルに着目して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 本村真編『辺境コミュニティの維持 島嶼、農村、高地のコミュニティを支える「つながり」』ポーター インク	6. 最初と最後の頁 179-215
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤本透子	4. 巻 162
2. 論文標題 カザフの子育て ゆりかごの向こうに広がる世界	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『季刊民族学』（特集「展示に探る民族の世界観・死生観」）	6. 最初と最後の頁 67-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤本透子	4. 巻 -
2. 論文標題 社会再編のなかのイスラーム 地域における生き方の模索	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 宇山智彦・樋渡雅人編『現代中央アジア—政治・経済・社会』日本評論社	6. 最初と最後の頁 209-230
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 藤本透子	4. 巻 -
2. 論文標題 イスラム社会における喜捨 中央アジアのカザフスタンを中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 伊藤利勝編 『功德と喜捨と贖罪 宗教の政治経済学』愛知大学人文社会学研究所	6. 最初と最後の頁 203-245
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Toko Fujimoto	4. 巻 -
2. 論文標題 Childcare Practices: Health and Happiness for the Little Ones	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Yuriko Yamanaka et al. (eds.) National Museum of Ethnology: Exhibition Guide.	6. 最初と最後の頁 202-205
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤本透子	4. 巻 -
2. 論文標題 人生儀礼 1 : すこやかな成長への願い	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『国立民族学博物館展示案内』	6. 最初と最後の頁 202-205
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤本透子	4. 巻 -
2. 論文標題 カザフスタン	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 中牧弘允編 『世界の暦文化事典』丸善出版	6. 最初と最後の頁 1-4
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計17件(うち招待講演 0件/うち国際学会 9件)

1. 発表者名 Toko Fujimoto
2. 発表標題 Qazaq dalasindaghi aruaqtargha baylaniti salt-dasturler: etnografiyalıq salıstırmalı zertteu
3. 学会等名 The International Centre for the Rapprochement of Cultures under the auspices of UNESCO et al. "Philosophical understanding of the phenomenon of the intangible cultural heritage of Central Asia" (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Toko Fujimoto
2. 発表標題 Kazakhskaya etnograficheskaya kolleksiya v Yaponii
3. 学会等名 Istoriya kazakhskoi gosudarstvennosti v artefaktakh i arkhivnykh dokumentakh (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Toko Fujimoto
2. 発表標題 The Healing of Children's Illnesses among Kazakh Women in Villages of the Steppe: Religious Practices in Social Reconfiguration
3. 学会等名 International Workshop "Social and Religious Dynamics of the Central Eurasian Steppe: Anthropological and Historical Approaches" (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Toko Fujimoto
2. 発表標題 Introduction
3. 学会等名 International Workshop "Social and Religious Dynamics of the Central Eurasian Steppe: Anthropological and Historical Approaches" (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Toko Fujimoto
2. 発表標題 The Transformation of Saint Veneration: A Cultural Anthropological Study of Mashhur-Jusip ' s Grave in Northeastern Kazakhstan
3. 学会等名 International Conference “ History and Culture of the Great Steppe ” ( 国際学会 )
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Toko Fujimoto
2. 発表標題 Perspektivy etnograficheskogo issledovaniya kazakhov v Yaponii: Altaiskie materialy v Natsional ' nom muzee etnologii
3. 学会等名 International Roundtable Discussion “ Altay in History and Culture of the Great Steppe ” ( 国際学会 )
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Toko Fujimoto
2. 発表標題 Etnologicheskoe issledovanie Bayanaul ' skogo regiona s vzglyada yaponskogo issledovatelya
3. 学会等名 International Roundtable Discussion “ History and Culture of the Great Steppe ”、Pavlodar State Pedagogical University ( 国際学会 )
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤本透子
2. 発表標題 カザフスタンにおける伝統医療の展開と女性治療者
3. 学会等名 京都大学東南アジア地域研究研究所共同研究会「社会主義を経たイスラーム地域のジェンダー・家族・モダニティ」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 藤本透子
2. 発表標題 カザフ草原に生きる家族
3. 学会等名 金沢星稜大学人文学部会・教養教育学部会講演会「つながりの比較文化 家族、コミュニティの起源・普遍性から未来を考える」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤本透子
2. 発表標題 伝統医療におけるコミュニケーションの共有性 カザフのエムシ（治療者）の事例から
3. 学会等名 日本文化人類学会第51回研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Toko Fujimoto
2. 発表標題 The Religious and Social Aspects of “Ancestral Lands” in Rural Kazakhstan: An Anthropological Perspective.
3. 学会等名 ESCAS-CESS Joint Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Toko Fujimoto
2. 発表標題 Economic Activity and Rituals for Maintaining Regional Society: A Case Study of Kazakh Villages in Central Asia.
3. 学会等名 International Conference “Community Maintenance in Periphery” (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 藤本透子
2. 発表標題 草原の村のイスラーム 人類学調査から
3. 学会等名 大学共同利用機関シンポジウム
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 藤本透子
2. 発表標題 カザフスタンにおける喜捨の展開 神・死者・生者の関係に着目して
3. 学会等名 第50回日本文化人類学会研究大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 藤本透子
2. 発表標題 聖者（アウリエ）となった学者 カザフスタンにおける聖者崇敬とマシュフル・ジュスプの墓廟の変遷
3. 学会等名 国立民族学博物館共同研究「宗教人類学の再創造 滲出する宗教性と現代世界」
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 藤本透子
2. 発表標題 カザフスタンにおけるエムシ（治療者）の活動と伝統医療の展開
3. 学会等名 国立民族学博物館共同研究「呪術的实践 = 知の現代的位相 他の諸実践 = 知との関係性に着目して」
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

藤本透子2023「馬乳酒で体を癒す」『月刊みんぱく』47(4):7.  
藤本透子2017「中央アジアの人びとが経験した社会主義」『月刊みんぱく』41(12):6.  
藤本透子「カザフスタンに関する文化人類学(民族学)研究の課題」日本・カザフスタン外交関係設立30周年記念「日・カザフスタン研究者交流会」2023年。  
藤本透子「カザフ伝統医療の世界」みんぱくウィークエンド・サロン、2018年。  
藤本透子「カザフの食と儀礼 ひとの一生を彩る草原の恵み」みんぱく友の会講演会、2018年。

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会	開催年
Social and Religious Dynamics of the Central Eurasian Steppe	2020年～2020年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
カザフスタン	R.B.スレイメノフ東洋学研究所		